さよなら僕の英雄

井上

イヤフォンから流れる音楽が切り替わる。中村一義の『犬と猫』が、俺の鼓膜を揺らした。さっきまで流れたフジファブリックの『茜色の夕日』が溶けている部屋の空気が、少しずつ中村一義と混ざり合ってゆく。

キーボードに吸い付いていた指を引き離すと、身体が自動的に伸びをした。バキバキ背中が悲鳴をあげて、しんと静まり返る。時刻は深夜の一時を少し回ったところで、窓を暗闇が濡らしていた。星はひとつもない。小一時間ブルーライトの浴び放題を喰らっていた俺の眼球は、瞬きするたびに乾燥を訴えている。

休憩がてら机の端に鎮座している小さな箱を撫でた。ダイヤル、目盛り、アンテナ、だらりと垂れ下がる片耳だけのイヤフォン。俺の青春で、人生。

そのラジオを買ったのは高校入学を目前にした春の日だった。きつくなった制服で中学校を卒業し、やることがなさ過ぎて近所の電気屋で買ったのだ。はじめて合わせた周波数は耳がもげるほどの雑音と僕を繋げてくれた。ダイヤルに伸ばした指が冬の名残で乾燥していて、ざらつきにひっかかって、昨日のことのように覚えている。

知らない世界がある。知らない文化がある。

僕が生きているものとは違う世界があって、周波数をずらすたびに世界が変わってゆく。夢中になって回していたら、ギザギザしていた音がきれいな音楽にぴったりと重なった。知らない世界の扉を、あの日ほんのすこしだけ開いた気がした。

イヤフォンがしんと静まり、また新たな曲が始まる。Coldplay の『yellow』だ。ほくそ笑んで、噛み締める。

ダイヤルを指でなぞる。中学生と高校生の狭間にあった頃の、少しだけかさついた幼い指じゃなくて、武骨で太くなった指で。窓はまだどっぷりと暗くて、そういえばあの日もこんな夜だった。

ぶかぶかで手首を覆い隠す黒袖は、いつまで経っても自分の身体に馴染んでくれなかった。まぐれで受かった進学校。黒板に何倍速で書かれ消されて書かれていく文字や数式や記号。煌めいた声で満たされる部活動。制服をさっさと着こなしてしまった同級生たちが駆けていく隅で、第二ボタンのあたりを握りしめて俯くのがやっとだった。そのうち第二ボタンを閉められなくなって、袖を通せなくなって、学年がひとつ上がったときには一日を狭い部屋で過ごす日がほとんどだった。

イヤフォンからまた新たな曲が飛び込む。HumpBack で『拝啓、少年よ』。紙をめくる音が聞こえるようだった。

指がふたたびキーボードに吸い付く。数文字打ち込んで、首を振って消す。あの頃の黒板は何倍速のウサギだったんだろう。亀はのたのたと拙い音を立ててゆく。

新緑が気怠い灼熱に取り替わった頃、どっぷりと深い夜の中で、ふと机の隅に佇む黒い箱と目が合った。俯いている気がして、なんとなく指でなぞった。イヤホンを嵌めて電源を入れるとざらついた雑音が耳をつつく。適当にかちかちダイヤルを回した。誰かの声が聞きたかった。

「始まりました、フラッシュラッシュのパパラッチ！お相手は私、フラッシュラッシュの小鳥遊裕樹とっ、小林拓で、お送りいたします」

ぶれた雑音から、賑やかな光が浮き出された。

その日から日夜部屋の扉をぴったりと閉めて、ラジオで耳を塞いでいた。カーテンも閉め切った四角形の中でラジオだけが僕をいきつないでいた。学校が怖かった。将来が怖かった。何もかもが怖かった。

そんな時にパーソナリティの声、ジングル、トーク、

曲が、沈んでいく僕の四肢をすくい上げてくれた。はじめて知る名前が次々と救世主の名前に変わっていく。くだらない冗談や、薄汚い醜い悪意をまぜこぜにした一時間が、妙に心地よかった。断絶された四角形が、世界と繋がる時間だった。

曲が切り替わり、世界が変わる。サニーデイ・サービスで『今日を生きよう』。これが流れた日は、小林さんが遅刻した伝説回になっていた。

一度パソコンをスリープさせて、両手でしっかりとラジオを握る。布団の中で震えながらラジオを握りしめていたあの日をなぞるように。パソコンの画面は眠っていて、俺の輪郭がかろうじてわかった。

日ごとに過ごしやすい風が身体を撫ぜていく頃、僕はまた黒袖に腕を通し始めた。第二ボタンを嵌めた。

きっかけは『フラッシュラッシュのパパラッチ』だった。パーソナリティの小鳥遊さんが中学時代学校に馴染めなくて、ラジオに救われた話をいろんなエピソードトークで話していた。それを聞くたびに、勝手に僕の今と重ねていた。小鳥遊さんが流す曲をウォークマンで聞きながら登校した。番組を録音したカセットテープをこっそり学生鞄の底に忍ばせた。制服と学校に奪われた酸素を取り戻すように。

酷使しまくったイヤフォンが音楽を紡ぐ。フラワーカンパニーズで『深夜高速』。勉強机の上であるいは布団の中で、時にはベランダに寄りかかって。支えとなった大事な曲のひとつ。

乾燥しきった眼球が疲労を訴える。真っ黒のモニタでもわかるくらいの疲労感。毎回締め切りぎりぎりに執筆を始めるからこうなるんだぞ、俺。独り呟いてパソコンに光を灯した。これだけは、どうしてもこれだけは形にしたい。

窓の外が再び新緑を芽吹かせた頃、僕は『フラッシュラッシュのパパラッチ』にネタメールを投稿し始めた。なんとなく思いついたし投稿してみるか、みたいな素振りで、そのくせそわそわ気にしながら送信ボタンをクリック。誰も僕のことなんて見ていないというのに。

打率はものすごく悪い。当たり前だ、とんでもなく面白いハガキ職人はごまんといるのだから。それでも自分のラジオネームが呼ばれるかどうか、一時間ずっと気がかりになっていた。毎日どんなネタを投稿しようか頭を悩ませて、なんとか教室でいきつないでいた。

「井上」で「いのうえ」で「胃の上」。

で、『ノド』。

安直ラジオネーム。だけど僕の一張羅。羞恥心スクナメ、自己顕示欲マシ、承認欲求マシマシ。ただの聴衆に名前を付けて、制服よりも着こなすことに必死だった。

はじめて呼ばれた夜は、目が冴えるほど浮足立った。ＳＮＳを開いて、三日月アイコンで長文ツリーを繋げてしまうほどに。

『僕、全然学校行けてなかったんだけど、最近パパラッチに投稿するメールのネタ考えて学校乗り切ってる』

文を打ち切って、すこしためらう。もしフラッシュラッシュがエゴサしてこれを見つけたらどう感じるだろうか。重いだろうか。いやでもＳＮＳの評判が継続に左右されることもあるし、云々。えいやっと送信ボタンを押したときには、外が明るくなってしまっていた。

新たな音楽が産声を上げた。世田谷ピンポンズで『カレーライス』。これが流れた日、メール採用されたんだ。

首をぐるりと回して、モニタから顔を上げる。俺の顔を移す暗闇がぽっかりと切り取られている。ああ良かったまだ夜だ。びかびか眩しいモニタに気を取られると、あっという間に太陽が黒をひっぺがしてしまうから。

桃色がつぼみを膨らませる頃、僕はやっと高校を卒業した。細長い手首は黒からはみ出そうになっていた。それを灰色のパーカーでまた覆って大学に入学して、まっすぐに小さな扉を叩いた。倉庫と書かれた重たい扉。

『こんなネタメールを書いてますがもうすぐ卒業です。ほんとうにパパラッチに生かされてました。小説家が夢なので、絶対にフラッシュラッシュのパパラッチを題材にして一本書きます』

僕が最後に送ったメールの、ほんとうに最後に打ち込んだ文章。ふたりは読んでなどいないと思う。だってこのメールはそもそも採用されなかったし、『ノド』はただのモブであって主人公ではない。だけれども、だからこそ、勝手にした約束を守りたかった。

また新しい曲になった。サイダーガールで『ぜったいぜつめい』。勝手な約束をしたあの日には、確かこれが流れていたはずだ。

曲がった背筋を伸ばして、画面の文字と向き直る。俺の顔をこうこうとモニタが照らす。あの日の約束が俺を照らす。書き上げなければいけない。締め切りが来る前に、なんとしても。すぐに夜が明けてしまうから。

総合文芸サークルで同期や先輩や後輩と出会って、腹ばいより幼い恥、もとい小説を書いた。批評されるたびに痛む胃にウーロン茶を流し込んで、それがアルコールに変わって、それでもなんとかサークルに通えていた。

こっそり約束を果たそうとしてはいたが、言語のなり損ないが生まれるだけだった。これじゃあ駄目だ。僕の酸素はこれじゃない。もっと腕を上げたい。もっと文章力が欲しい。もっともっともっと。

あくびをかき消すように、曲が切り替わる。SUNNY CAR WASH で『キルミー』。はじめて行ったフラッシュラッシュの単独ライブでは、この曲が入り曲だった。

モニタが一段階暗くなって、充電量不足を告げてくる。ここで落ちたら俺は立ち直れない。がちゃがちゃと煩い机の上でパソコンの救命活動をする。さながら俺はレスキュー隊。慌てて上書き保存してアダプタを繋げてやった。任務完了。一仕事終えた四肢を椅子に下ろすと、はずみで何かが倒れた。

古いカセットテープと、掠れた『最終回』。

元来細い目をきゅうと狭めて、カセットテープを立て直す。何度も聴いて何度も泣いた。俺の青春で、人生。

『フラッシュラッシュのパパラッチ』は、僕が就活やら卒論やらを意識し始めたときに、最終回を迎えた。ニュースサイトが速報を流したときに、大学の大教室で素っ頓狂な声を上げてしまった。

なんとなく勝手に、一生続くと思っていた。

年をとってもずっとそばにいてくれると思っていた。

根拠もなく。

フジファブリックの『茜色の夕日』はずっと流れると思っていたし、電子音のジングルはずっと響き渡ると思っていたし、小林さんと小鳥遊さんの声はずっと聞こえると思っていた。

現実はいとも簡単にあっけなく、小さなニュースまとめサイトなんかで終わりを告げられる。そのくせ大教室の隅のモブ一人なんて、かんたんに絶望へと誘う。

正直に言うと、爆発的な人気を誇るラジオではなかった。パブサしてみれば数多くの感想や愛が敷き詰められているが、批判だって顔を覗かせていた。聴取率も他の曜日に比べて芳しくないとよくネタにしていた。そもそもラジオを聞く人だって限られている時代だ。

それでもずっとそばにいてくれると思っていた。

耳を撫でる音色が消えて、また手を伸ばしてくれる。

ザ・ガール ハントで『世界はバランス』。

再び直立した古いカセットテープを横目に、俺はキーボードをたたく。そういえばあの日から一人称を「俺」にしたのだった。変わろうと思った。勝手に自分で節目をつくって、本当に痛いリスナーだ。

結局最終回を迎えても約束は果たせなくて、同一の放送軸で新しい番組が始まって、俺はそのまま周波数を合わせることをやめてしまった。俺は『フラッシュラッシュのパパラッチ』が流れるあの一時間が酸素だった。頭のてっぺんから爪先の爪まで、間違いなくあのラジオに生かされていた身体だ。

モニタに文字が整列する。なんとか面倒ごとを倒して卒業を控えた今、ブラックコーヒーを仲間に従えて俺はパソコンとにらめっこを始めた。卒論より真剣に、と言うと教授に怒られそうだが、熱意は同じくらい込めて。好き勝手踊り狂う文字を整列させて、時折消して、また並べて、やっと納得いく形に仕上がった、と思う。約束果たせたかなあ、俺。

黒い箱をまた指で撫でる。俺に酸素をくれた箱。

音楽が変わる。ズーカラデルで『夢の恋人』。

最終回で小鳥遊さんが流した曲だ。擦り切れるほど再生したカセットテープにも、少々ざらついた同じ音が閉じ込められている。最終回とは思えないほどいつも通りふざけて、それではここで一曲、と滑り込ませた曲だ。ええ曲かけるやんけ、と口の中で呟いた。

このラジオのことなんかすぐ忘れろよと、小鳥遊さんは笑い飛ばしていた。寝坊すんなよ！　と小林さんは野次を飛ばした。俺より何倍もかなしくてくやしいはずのふたりが、笑っていた。

この曲に何を込めていたのか、それを俺は知るすべがない。そりゃあそうだ俺はいちリスナーだし、フラッシュラッシュはラジオパーソナリティだし。すぐ忘れろよと笑う声の何割が本心だったのか。寝坊すんなよ、にどんな感情が乗せられていたのか。なにもわからない。だからこそ、好きに重ねて勝手に同族意識を持って、酸素を受け取ることができたのかもしれない。

『フラッシュラッシュのパパラッチ』のことも、フラッシュラッシュのことも、いつかは日常に溶けて忘れていくのだろう。それでもあの時救われたことも、酸素を受け取ったことも、俺をかたちづくる構成要素の一部となっているはずだ。

永遠に、君のために。

ええ曲かけるやんけ、ともう一度だけ口の中で呟く。何十回何百回と聞いた男ふたりの笑い声が、どこからか聞こえた気がした。